

◆初詣に行ったばかりと思っていると、カレンダーは二月に移っている。初夢は見たけれど忘れてしまったり、何事も三日坊主の横着者で年を重ねている。「三日坊主も、十回やれば一カ月になる」、そんなくり返しもいいではないかと言われるが、今に至っては時を刻む時計の針や日付などは頭上を駆け抜けてしまう。地球の回転が早送りになっているような気がして、何事にも追いつかなくなってきた。面倒なことはやり過ぎして、残された時間を大切にしよう。

市川茂子

◆新型コロナウイルスの感染拡大で、この一、二週間が瀬戸際だという（専門家会議）。下の子と同居を始めて三ヶ月、子は見習いから正社員になったが、残業続きという働き方は変わらない。じぶんが感染して、うつしたらいけないと引きこもりのような生活に戻ってしまった。近所を散歩して、しる犬にあうくらいのことによるこびがある。メグちゃん（茶の柴）は無口というか、反応らしいものがないので、こちらから近づくしかない。そこがいいと思っている。公園の多くの年よりがメグちゃんに声をかけている。

小野澤繁雄

◆年度末になっていよいよ卒業式を残すのみと思っていたら、新型コロナウイルスなどということんでもないものが日本を襲ってきた。子どもをウイルスから守るために春休みを前倒しして休校に入ったが、今度は家に居られない子どもたちを学校で見るとのお達しである。日々変わる国の態度に市町村も学校も右往左往している。先の見えないコロナウイルス。対応策も薬も含めて何か特効薬はないものか…。

神村ふじを

◆三年前に新調したパソコンだけれど、起動が遅い。最近のは起動も早く使い易いらしい。年末に、パソコン本体にプリンター、下取り付き等々のセールスに乗ってしまった。前のPCはネットに接続せずにWord（ワード）やExcel（エクセル）に使うことにした。パソコンは、強いけれど離れられない朋友である。

河村郁子

◆今年は暖冬と云われていますが寒波がくるとやはり寒いと思います。今年は、次女の急逝で服喪中で、お正月のお祝いごとは何もできませんでした。次女は五十二歳の突然死でした。思いがけず逆縁となり悲しくて悲しみは死ぬまで続くと思われまます。唯いただいた命なので大切にすごしてゆこうと思っております。

谷垣満壽子

◆昨年十二月三日、父が九十歳の天寿を全うした。腎不全だったが、まったく苦しまず逝った。十五年くらい前、私は父の半生を『昭和五年に生まれて』というタイトルでまとめたといと、父から聞き取りをした。さまざまな出稼ぎの話はおもしろかった。父は母と二歳の私を連れて一冬立川で暮らした。小河内ダム建設によって下りて来た人たちに、鍋釜を満載した十銭店を引いて売り歩く仕事をしたのだ。家を新築した人たちは調理用具も新しくするらしく飛ぶように売れたという。砂川闘争の真っ只中だった。私は東京弁べらべらになって帰ってきたそうだ。この話などはもっとも興味深い。聞き取りが中断し、まとめることができなかったのは残念だ。父の葬儀の朝、新聞受けに「中村医師銃撃され死亡」の文字を発見。これまた大きなショックだった。二〇〇一年からペシャワール会員になり、会報の中村医師の言葉の数々に感銘を受けてきた。まだ享年七十三歳。惜しまれてならない。

新野祐子

◆うちから徒歩十五分ぐらいのところにある中学校の校庭の草地に、見慣れない鳥がとことこ歩いていた。ヒヨドリよりやや小さく、全体に黒褐色で、目のところに黒い線があり、目の上とのどは白っぽい。あとで野鳥図鑑で調べたら、どうやらツグミのようである。うちの周りといえばカラスぐらいしかないので、変わった野鳥を見るとひどく得した気分になる。

松井淑子

◆泉岳寺の方丈様が昨年末にお亡くなりになられた。奇しくも、私と息子・ハルは、方丈様が茶毘に付される前に立ち会うことができ、お参りさせていただいた。驚くほど美しく、静謐な横顔はまさに仏様のお顔だった。そのことを奥様に告げると、「美しい生き方をしたんでしょね」と一言。方丈様は亡くなる前、各方面に書簡にて二つのことを告げたという。一つ目は、今後の泉岳寺の住職は血縁に頼らずふさわしい僧に跡を継いでもらうこと。二つ目は、住職の妻子は寺で居を共にすることなく、寺の運営は僧侶たちで行うこと。子どもを宿すことなく、何十年にわたり三百六十五日寺を切り盛りしてきた奥様への愛が、方丈様の最後の表明に至ったのだろう。両親がもういない私にとって、菩提寺の方丈様と奥様の存在は大きかった。令和の幕開け、私の中で一つの時代が終わった。

山内裕子